

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(84)

私は三陸の港町として栄えてきた久慈市で生まれた。内陸部の大半が山地であり、海の幸と山の幸に恵まれた地域である。仙台に移り住んでも、海と山で暮らしていることが、もともと日本人の生活の姿であったように思っていた。

しかし、近年は山村を取り巻く環境は厳しく、集落の消滅すら危惧されるようになってしまった。今、なぜ集落の消滅というような事態に直面しているのか。その要因を明らかにするため、住田町上有住地区を訪れた。

調査でわかったことは、山林を所有している世帯の大半が生産の場としての山林を放置していることだった。農林家の高齢化が進んでいることや安価な農産物輸入品に

対抗できないことが原因であるが、山地農業の崩壊が山村崩壊の要因となっていることに間違いはないようである。

しかし、そこに住み続ける人がいる。生産の場としては機能

全国的山村は確かに衰退の一途を辿っている。高齢化が進み、集落の共同作業が減り、コミュニケーション機能がなくなりつつあるという。ただそれは、山村に住む人が「元気をなくしている」こと

久慈市での少年時代夢中になって駆け回った山は削り取られ、新興住宅地に変わった。海も埋め

大きな存在、他の地域に誇れる宝、子供にとっての格好の遊び場、大人にとっては生産、あるいは心を潤すもの。これらこそが五葉山それ自体がもつ魅力なのではないかと。

私は思う。人々の出会いや交わりの中で培われてきたもの、自然に抱かれて感じることで、そうしなことを大切にしていくことが、地域に生き、暮らすことの意味だと。

【執筆者プロフィール】岩手県久慈市出身、宮城県仙台市在住。1982年生まれ。久慈地域

と琥珀のかかわりや、北上山地の山村に住む人々と地域環境とのかかわりを研究。
修士論文「北上中山間地域の人口急減地区における集落維持の要因」の調査のため、上有住地区の集落に住む人々を訪ね回った。東北学院大学大学院人間情報学研究科博士課程前期2年。

自然を守り山村に暮らす

宮城県仙台市 古河 亮介

しない山林に毎日入って、少しばかりの手入れをしている。五葉山に季節の移ろいを感じ、精神的な満足感を得ている。顔見知りのお隣さんとの

とイコールでは決してない。不便でも、そこに暮らしている「意味」がある。そこに住む人の「愛着」というものかも知れない。

私は、五葉山こそが五葉地区に住む人々の「愛着」そのものであるように思う。当たり前すぎて気がつかないが心の中の



調査で住田町上有住地区を訪れた際に撮影した五葉山

リレー
エッセイ

何でもない会話、地域の祭りのことの打合せ、農産物を持ち寄って楽しむ生活。そこに地域の日々の営みの姿を見る。

私には、人々の日々の営みが蓄積された「思い出を残すこと」であるように思う。思い出の場所を失って初めて気づくこ